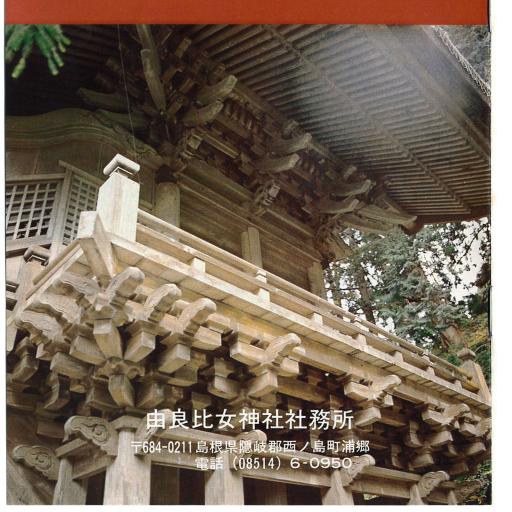
## 《隠岐一宮》 由良比女神社 と日吉神社





は巧みで扇の手は綺麗です。

左、前、後、丸く展開し踊りと踊りの移行静と動、緩と急、単調と変化にとみ、右

イ」と掛声です。

**手が繰り返し、スッテンが「ソーイソイソ** 

ら小ざさらはささらで、

スッテンは鼓を持

十方拝礼

踊りは

化にとみ、都の香り、平安の昔を偲ばせ九前半は単調で飽きられやすく、後半は変 自年の年輪を感じます。

の諸神事を伝えていることは不思議でもあ 百年以上の御旅の祭り、九百年の日吉神社浦郷は昔は島内一の貧乏村でしたのに二

威儀正して観覧します。 笠揃えといいます。 揃えといいます。裃姿の庭の舞の舞人が前夜祭の午後、総練習をします。これを

### 由 良比 女神

祭 神 須勢利姫命

例 祭 七月二十八日 (土地では由良比女大神)

特殊祭 神帰祭(かみがえりさい)

一月二十九日

と六国史に見え、 成天皇元慶元年に朝廷より鄭重な祈禱あり に預り承和十五年、 当社は仁明天皇承和九年(八四二年)官社 土佐日記に「ちぶり神」とあります。 に名神大・元名和多須神とあり、 醍醐天皇の延喜式(九〇五 清和天皇貞観八年、 袖中

れたと思われます。 交通の要点としての隠岐の国の諸神ととも 遣す時、新羅の賊兵の侵入を防ぐなど大陸 に朝廷に尊崇せられ、 海上安全守護の神として遣唐使や使節を 一般世人にも信仰さ

したが、以後徳川時代の中頃まで衰微して 平安朝末期に隠岐国の一宮と定められま

寛文七年(一六六七年)松江藩士斉藤豊仙

き神光あらわれることを願い、 詣でし橘三喜、都々美一光もその衰微を慨 とあり、元禄九年(一六九六年)一国一宮に あり極めて小さく古りはてて亡きが如し」 の隠州視聴合記に「由良明神と号する小社 都々美一光

おきつ風吹きつたへなむ由良姫の 御籬によする浪のしらゆふ

響も の神 して武士の時代になると遠流の地隠岐の国 り努力したと思われますが、衰微の原因と 年に本社建立をしていることは里人もかなと詠って去りました。慶長十二年、元禄五 測されます。 大きかったことが神社衰微の原因と推 田畑の少ない浦郷では、天災による影 々の加護を必要としませんでした。ま 航海術の進歩は九州拠点となり、隠岐 覇権を奪るには不要な土地であ 造

ることは島前に於ける当社の位置を示して 庄屋が集まり、 安永二年 (一七七三年)島前十三ヶ村 御旅祭の再興を相談してい 0

別神社に指定されました。 整備して神域を整い、 殿を改築し、昭和六年拝殿改築、境内地を 明治五年郷社に列し、二十二年精巧な本 昭和五十年島根県特

います。 の海上渡御即ち御旅祭をします。 当社の例祭は大祭り、小祭りを交互に行 小祭りは祭典だけ、大祭りは神輿

きめ、 礼と相極申候とあります。 貫文を祭礼料として拠出し、島前一統の祭 たために中断していたのを慨いて安永二年 (一七七三年)に島前の庄屋が集まり再興を 御旅祭は往古より行われ、余り盛大だっ 島前より青銅三貫文、 浦郷村より三

迎するのも時代流れでしょうか。 押し合い、へし合いの勢よさ、チョウーサ、 余の鮮魚運搬船三隻を杉丸太で厳重にから を組み合せ女人禁制、今は近代装備の百り 宮司宅の仮宮に入御、 で見物人の肝を冷すこと再三、十一時過ぎ 威勢よく練り歩き、午後八時半神船(みふ みます。 七月二十八日午後七時神輿出御、 九時半海岸広場に接岸、 に乗船、供奉船を従いて海上巡幸一 婦女子も乗せ、 へし合いの暴れ神輿、 チョウヤッサの掛声 神船は昔は和船三隻 観光客の乗船を歓 漁村特有の威 荒れ神輿 境内で 時

翌二十九日はこの逆コースで還幸します 山陰最大の船祭りです。



いか寄せの浜

# 神帰祭(かみがえりさい)

ざいりまつり)ともいいました。 か寄せ祭り」といいます。昔は御座入祭(ご 再三このことがありました。土地の人は「い ずいかが寄ると伝えられていて、戦後でも 日に帰られます。この時は多少にかかわら 当社の祭神もこれに出席され十一月二十九 八百万の神が集まり諸事を相談されますが、 十月は神無月ですが、 出雲国は神在月で

# 伝説と「いか寄せ」のこと

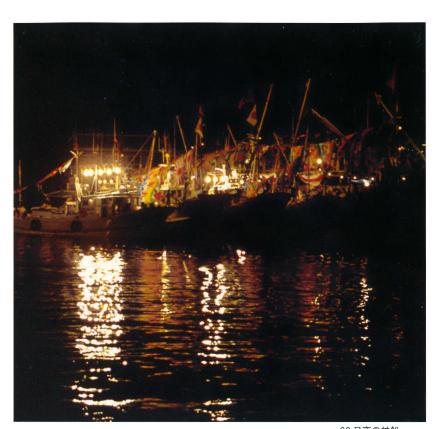
手に持って祭神が現われたとのこと。 神武天皇の時、由良の浜の畳石にいかを

その非礼を詫びていかが毎年寄るようにな 手を海にひたしたところいかが噛みついた ったとのこと。 また祭神が芋桶に乗り渡海される時、 御

夫利島のいか浜にあったのを浦郷に遷され 知夫里島の伝説に由良比女神社はもと知 かは十一月末より二月初めまで寄りま いかが寄らなくなったとのこと。

いかが寄る時まをで「た拾い小屋が並んでいました。 戦前は由良の浜いっぱいにずらりとい

かが寄る時は夜で「シュツ、 シュッ



28 日夜の神船

考えられます。

漁船の近代化がいか寄せに影響があるとも

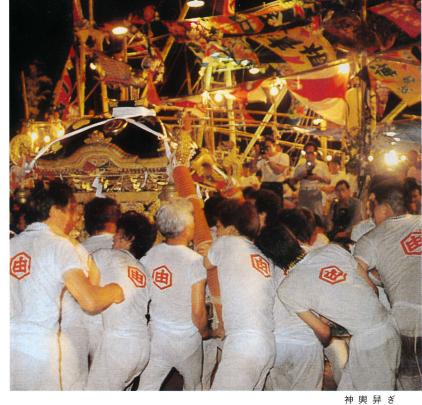
多数漁船の繋留など漁業施設、

は話します。

も今夜も」と婦女子が見物に行ったと古老

大正初期に連日連夜いかが寄り、

「今夜



より北上して隠岐島に来るといわれていまいかは回遊性で沿海州・朝鮮半島・対島

いかはなぜ寄らないか

戦後は漁船の大型化・近代化で百少以上

寄せて来ます。小屋に息をころして待って

と音を立てザワザワと波しぶき上げて押し

づかみで拾います。拾った人の占有物で、いた里人は遠浅の海にとび出して、籠や手

### いっぱい持ち帰った署員など、いか拾いの察署長以下全員が拾って大晦日に故郷に箱 戦前は田畑を買った人、 エピソードは沢山あります。 い拾って転職した警官、歳末警戒の帰途警

戦後は小舟いっぱ

思います。 漁船で、浦郷湾や由良の浜に回遊しないと 沿岸へのいかの回遊を妨げている大きな原 中に多数出漁し、一隻数十万まの電力照明のいか釣り船が沖合漁業として日本海の真 因と考えます。 (漁火) 多数の機械釣りによる漁獲は本土 大正末期に浦郷湾に定置の大敷網が敷か よしんば沿岸に回遊しても近代的な小型

良湾の狭少、汚染、漁船の昼夜を分たぬ航れ、戦後は築港・護岸・養殖事業による由

いかの寄ることは益々困難になると思いま 全く夢のような話ですが近代化の現在、



## *\**

## ◆由 緒

## 例 祭 旧九月九日

ます。 の相撲、 年ごとに行われる神事として、 奉遷したと伝えられています。 を奉じて九百年前に浦郷に移り、 の時代に領主真野宗源が祝部吉田氏ととも に兵乱を避けて氏神の山王権現、 市真野町)に祀られていたのを後白河法皇 当社はもと近江国滋賀郡真野庄 十方拝礼は田楽のことです 方拝礼(しゅうはいら) 当社には隔 庭の舞・神 現社地に 八王子社 があり

の祭りといわれていました。昔は神楽・大般若経の転読とともに五本

いつしか止みました。社と改称、大般若経の転読は廃され神楽も社と改称、大般若経の転読は廃され神楽も

社の特色です。 近江伝来の九百年の舞楽を伝えることが当合せたもので、神輿昇ぎの多い島前地区で会せたもので、神輿昇ぎの多い島前地区で



神の相撲

考えられ、格式・斉戒を重んじ厳かな舞で考えられ、格式・斉戒を重んじ厳かな舞で

辞をしながら舞います。

と唱えて着座します。 命も永く千代の世までもサンヨ、サンヨ」 終わると「この宮の五本の祭をする人は

に浄衣、扇子で一回舞います。 例祭は侍烏帽子翌早朝潮ごりを取ります。例祭は侍烏帽子明 が 祭は殺付、袴、扇子で深更まで舞い、

不明、吉区を占う所作とも考えられます。 敗一分になるように指導され、故実伝来は 地一分になるように指導され、故実伝来は で登ります。三回この所作をとます。一勝一 に還ります。三回この所作を終わるとホー 神前中央で低頭拝礼の所作を終わるとホー

中月日は日下、也は奇曲上で、ことの旁、中月日は日下、現在は小中学生が踊ります。一年まで青年、現在は小中学生が踊ります。一年まで青年、現在は小中学生が踊ります。一十方拝礼は昭和の初めまでは壮年、昭和三

摩、脚絆、草鞋、脚絆、脇差、冠り物は四中門口は白丁、他は筒袖上衣、くくり袴、

